

発信 地域から



室蘭

海を越える介護人材

北斗文化学園の挑戦

④

卒業生学び生かし活躍

「熱々でおいしい」。昨年11月、登別市の介護老人保健施設「グリーンコート三愛」の昼食でラーメンを食べた入所者たちから喜ぶ声が相次いだ。普段は一齐に配膳するため冷めてしまうが、この日はできたてを一人一人に運んだ。題して「ラーメン活動」。企画したベトナム出身の介護福祉士グエン・ティフエン・チャンさん(26)は、室蘭市の北斗文化学園の北海道福祉教育専門学校を卒業し、同施設に勤めて4年目だ。

企画の担当に 入居者のQOL(生活



の質)向上を目指す企画の担当を初めて任せられ、「外出が難しい入所者に、少しでも食事を楽しんでほしい」と思いついた。スープをみそ、塩、しょうゆから選んでもらい、ゆでたての麺で提供。「食べ残しもほとんどなく楽しんでもらえたようだ」

と安堵した。高齢化で介護費用の増大が懸念される中、厚生労働省は2018年度の介護報酬改定で、寝たきりや認知症改善につながる自立支援や重度化防止を進める事業所への配分を重点化。こうした流れを受け、同校も19年に従

来の学科を自立支援介護福祉学科と改名し、先進的な介護技術を授業に取り入れた。チャンさんは「相手の尊厳を損なわない」で入所者の食事をサポートするチャンさん(左) 2024年11月12日

ず介護する自立支援の理念を学んだことが現場でも生きている」と語る。同じ施設では同郷・同窓の介護福祉士フナム・トゥエン・ゴックさん(25)も活躍する。就業1年目の時に、入浴を拒否していたお年寄りに約1カ月間、毎日積極的に話しかけて信頼関係を築き、入浴を受け入れても

理観が根付いており、介護の仕事になじみやすい」とみる。昨年度から外国人卒業生2人が勤務する苫小牧市の介護老人保健施設「みどりの苑」の祖父江毅介護主任も「利用者に笑顔で丁寧に対応し、安心して見ていられる」と話す。

価値観が近く

「努力家」「みんなに親しまれる」。同施設に限らず、同校の外国人卒業生に対する共通の評価だ。北斗文化学園は「仏教国のベトナムやミャンマーは、年長者を敬うなど日本と近い価値観や倫

理観が根付いており、介護の仕事になじみやすい」とみる。昨年度から外国人卒業生2人が勤務する苫小牧市の介護老人保健施設「みどりの苑」の祖父江毅介護主任も「利用者に笑顔で丁寧に対応し、安心して見ていられる」と話す。

卒業生の高い評価を受け、西胆振ではさらに介護分野で外国人材を確保する動きも出てきた。グリーンコート三愛を運営する登別市の特定医療法人社団千寿会はすでに同校在校生7人に内定見込みによる奨学金貸与を決定したほか、室蘭、登別両市の医療機関でも新たな採用に意欲を示している。北斗文化学園の取り組みが、地域の介護を支え始めている。

(室蘭報道部 村上真緒)